

### ヘーゲル『精神現象学』 「序説」 第27節～第29節の解明

YAMAGUCHI, Seiichi / 山口, 誠一

---

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

74

(開始ページ / Start Page)

21

(終了ページ / End Page)

33

(発行年 / Year)

2017-03-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013646>

# ヘーゲル『精神現象学』「序説」

## 第27節～第29節の解明

山口 誠 一

### 凡 例

1. 原文の隔字体は、本論稿ではイタリック体で表記し、訳文では傍点を付した。
2. 『精神現象学』第二版刊行に際し推敲された第一版対応箇所は、本論稿原文直下の ] 右側に表示した。

### 《第27節》

#### 【要旨】

『精神現象学』は学一般の生成を叙述する。感性的意識は精神を欠いている。意識経験を経て学の純粹概念を生み出す。①『精神現象学』はたんなる入門ではない。②『精神現象学』は学を基礎づけるわけでもない。③『精神現象学』は知的直観ではない。

#### (1) 『精神現象学』は学一般の生成を叙述する。

Dies Werden der *Wissenschaft überhaupt* oder des Wissens ist es, was diese *Phänomenologie* des Geistes darstellt.

1 Geistes darstellt] Geistes, als der erste Teil des Systems derselben, darstellt

学一般の生成、あるいは知の生成を叙述すること、それがこの『精神現象学』の仕事である。

《註解》ヘーゲルは、『精神現象学』緒論で「以上の必然性のおかげで学そのものへの道がすでに学であり、こうして学の内容からいえば意識の経験の学である」(Phän. S. 68) とのべている。意識の経験という内容は、意識にとっては、学そのものへの道であるが、この道が、その形式たる生成運動としては、わたしたちにとって学なのである。「学一般」とは、「学そのものへの道」といわれる場合の「学そのもの」である。そして、より具体的には、「序説」《第26節》(1)によれば「学の土台にして基盤」たる「絶対的他人的存在にありながら自己を純粹認識すること」である。

また、『精神の現象学』という書名の後に初版では、「学の体系の第一部としての」という語句が付せられていた。ここからすれば、第一部は学そのものへの道として消極的学であり、第二部は、学そのものとしての積極的学である。

## (2) 感性的意識は精神を欠いている。

Das Wissen, wie es zuerst ist, oder der *unmittelbare* Geist ist das Geistlose, das *sinnliche Bewußtsein*.

1 Geistlose] geistlose, oder ist

知識が最初にとる姿、すなわち、直接的な精神は、まだ精神を欠いたところの感性的意識である。

《註解》 この文で問題となるのは、直接的精神が直接的であるがゆえに精神を欠いていることである。端的にいえば、知識が最初にとる姿では、精神現象としての知が直接知と同一視されて無効になっている。

「感性的確信」冒頭でこういわれている。「最初に、換言すれば、直接にわたしたちの対象である知は、それ自身直接的な知、直接的なものつまり、存在するものについての知以外にはありえない」(Phän. S. 69) と。ヘーゲルはこの文で「知」を「最初に、換言すれば、直接にわたしたちの対象である知」と規定している。この句に関して注意すべきは、「知」は、原初的には直接的知ではなくて、わたしたちの対象となるものであり、それは、結局、現象する知である。そうであるからこそ、つぎに、そのような知を「それ自身直接的な知、直接的なものつまり、存在するものについての知」と規定し、しかもそれ「以外にありえない」としている。

このようにして、冒頭の文の「直接に」という言葉は、「知」が「わたしたちの対象」となる仕方であり、「最初に」という言葉の言い換えとして用いられている。また、それに続く文に従えば、そのような「知」を対象とする「わたしたち」の態度も「直接的」であり、しかも、それは、手を加えないでという意味の「受容的に」という言葉で言い換えられている。したがって、ここでは、「わたしたち」を哲学的観望者に限定することはできない。この事実を、ヘーゲルが、「知」と「わたしたち」を意識の場面における「現象的知」と叙述主体としての「わたしたち」にさしあたって限定せず、より一般的で原初的な場面から浮彫りにしてゆこうとしていることを示している。逆にいうならば、意識の経験の場面があらかじめ与えられていて、そこから「現象的知」の一つとしての「直接知」についての探究が始められるという意味での端初は、明らかに考えられていない。したがって、意識の経験の方法は、あらかじめ与えられてはいないのである。

それゆえに、端初で、まず問われるべきことは、そもそも「現象的知」とは、「直接的知」と同じであるのか否かということなのである。そして、それは、「このものとは何か」という問いのうちに示されている。つまり、むろん、ここでは、「このもの」は「現象知」において「普遍的なもの」としてとらえられるべきか、それとも、むしろ直接知において指示されたものとしてとらえられるべきかということが、問題にされている。本来、叙述主体としての「わたしたち」にとって「知」は、直接的には現れない。しかし、「知」と「わたしたち」を、原初的な場面でもらえた端初では、「現象的」と「直接的」とが暗黙のうちに同一視されているのである。現に、冒頭の文で、「直接的に」の言い換えとして用いられた「受容的に」という言葉が、「知覚」の章で、「必然的受容」という場合の「受容」から区別される場合には、ことさらに「現象的受容」ともいわれている (Phän. S. 79)。しかも、「感性的確信」と

は、「現象」は「直接的なもの」でしかありえないという倒錯した論理によって、「現象」概念を「直接的」の領域に狭めて、その概念を、精神の現象という本来的な領域から遮断するところに成り立っている。本文第二節で「感性的確信」が直接に現れるものとして「もっとも豊かな認識、いな無限に豊かな内容を持つ認識」であり、「最も真実の確信」であるとされていることは、そのことを裏書きする。そして、ヘーゲルが当該の章の三つの階梯を通じて、本来問うたことは、「直接的知」としての「感性的確信」の拠り所となっている論理が真でないということであった。そのことが明らかにされたとき、「現象的知」としての「感性的確信」は、直接知とまったく同じではなくして、実は、より根本的には、意識経験の出来事であることが示され、知覚へ移行することになる。

### (3) 意識経験を経て学の純粹概念を生み出す。

Um zum eigentlichen Wissen zu werden oder das Element der Wissenschaft, das ihr reiner Begriff selbst ist, zu erzeugen, hat es sich durch einen langen Weg hindurchzuarbeiten.

1-2 Wissenschaft, ... hindurch] Wissenschaft, was ihr reiner Begriff ist, zu erzeugen, hat er durch einen langen Weg sich hindurch

そこから、本来の知識まで生成してゆき、学の場面、学の純粹な概念そのものを生み出すためには、意識は身を労して長い道を通り抜けなければならない。

《註解》本節で、学の場面が、「学一般」「知」「本来の知」そして、「学の純粹概念そのもの」と呼ばれるに到る。そして、そこへと生成する際の出発点が、精神を欠いている感性的意識なのである。学とは、純粹概念による否定的運動であり、それは、知の自己産出運動である。なお、絶対概念と純粹概念との違いについては、《第23節》(5)およびその註解を参照されたい。

### (4) ①『精神現象学』はたんなる入門ではない。

— Dieses Werden, wie es in seinem Inhalte und den Gestalten, die sich in ihm zeigen, sich aufstellen wird, wird nicht das sein, was man zunächst unter einer Anleitung des unwissenschaftlichen Bewußtseins zur Wissenschaft sich vorstellt,

1-3 zeigen, ... vorstellt,] zeigen, aufgestellt ist, erscheint als etwas anderes, denn als die Anleitung des unwissenschaftlichen Bewußtseins zur Wissenschaft;

この生成が、その内容と、生成によって明らかになる諸形態とにおいて、いかなる有り様を呈するか、それは、学的でない意識を学へ導くということでもまず思い浮かべられるようなものとは、ちがっているであろう。

《註解》この『精神現象学』における生成の独自性が、ここで強調されることになる。第一に、『精神現象学』の道は、学的でない意識を学へ導く普通の入門ではない。なぜならば、『精神現象学』における自然的意識の遍歴する意識の経験の道は、すでにそれ自身学だからである。本節(1)の註解でのべたように、学一般の生成の内容はすでに意識の経験の学であり、意識の諸形態の系列とは意識経験の道で

ある。したがって、意識は、形態としては学的ではないが、その内容においては、規定された概念に対応していて必然的に体系へと展開する。

(5) ②『精神現象学』は学を基礎づけるわけでもない。

auch etwas anderes als die Begründung der Wissenschaft,  
また、学の基礎づけというものとも別物である。

《註解》 第二に、『精神現象学』の道は、ラインホルトがいうような学の基礎づけでもない。ラインホルトは、たとえば、『人間の表象能力についての新理論』のなかで、「あらゆる哲学の第一根本命題」として、「意識において表象は、主観によって客観および主観から区別され、かつ双方に関連づけられる」という意識律を提出している。しかし、ヘーゲルによれば、一つの命題のうちに、それ以外のすべての命題の土台となるような確実な事象が表現されることはありえないのである。

(6) ③『精神現象学』は知的直観ではない。

— so ohnehin als die Begeisterung, die wie aus der Pistole mit dem absoluten Wissen unmittelbar anfängt und mit anderen Standpunkten dadurch schon fertig ist, daß sie keine Notiz davon zu nehmen erklärt.

ましてや、靈感にあふれ、ピストルから発射するように、そのまま絶対知ではじめて、他の立場に対しては、まったく興味がないと宣言するだけで済ましてしまうようなやり方とは、まったく異なっている。

《註解》 第三に、『精神現象学』の道は、むろん、生成ということをもまったく予想していない、シェリングの知的直観とも異なるのである。

〔3〕 表象されたものと熟知されたものとを思想に転換すること、  
さらにこれを概念に転換すること

《第28節》

【要旨】

普遍的個人の形成陶冶が『精神現象学』の課題である。普遍的個人（個体）では無教養で不完全な個人（個体）が全契機が現象する。無教養で不完全な個人（個体）の一つが支配的となり普遍的個人（個体）はほかされる。精神の各段階では以前の段階は目立たなくなる。事象そのものの形態は後には陰影となる。意識経験は実体の想起である。学への導入は過去の想起である。個人は普遍的精神の諸段階を過去としてたどる。『精神現象学』は成長過程である。個人の教育的進級課程に世界史が映されている。世界史は非有機的自然である。形成陶冶は非有機的自然の占有である。形成陶冶は実体の自己意識化で

ある。

(1) 普遍的個人の形成陶冶が『精神現象学』の課題である。

Die Aufgabe, das Individuum von seinem ungebildeten Standpunkte aus zum Wissen zu führen, war in ihrem allgemeinen Sinn zu fassen und das allgemeine Individuum, der selbstbewußte Geist, in seiner Bildung zu betrachten.

1 Aufgabe] Aufgabe aber

2-3 der selbstbewußte Geist] der Weltgeist

個人（個体）を無教養の立場から知にまで導くというのが課題であるが、これを普遍的な意味に理解し、自己意識的精神としての普遍的個人（個体）を、それを形成陶冶するというで考察しなければならなかった。

《註解》ここでは、意識という言葉の代わりに個人（個体）という言葉が登場してくると同時に形成陶冶の問題が出てくる。形成陶冶は、前節の生成ということのヘーゲル独自の意味を明らかにするために用いられている。したがって、普遍的個人（個体）を形成陶冶の過程において考察するとは、前節の「感性的意識」から「本来の知」への生成と同じことなのである。しかも、個人（個体）の形成陶冶が普遍的な意味で理解されなければならない。ということは、その形成陶冶が、或る特定の人にとっての出来事にとどまらず、一定の時代に生きる個人（個体）すべてにとっての出来事であり、さらには世界史を体現した自己意識としての個人（個体）つまり、普遍的個人（個体）の出来事だということである。

(2) 普遍的個人（個体）では無教養で不完全な個人（個体）が全契機が現象する。

— Was das Verhältnis beider betrifft, so zeigt sich in dem allgemeinen Individuum jedes Moment, wie es die konkrete Form und eigene Gestaltung gewinnt.

— [普遍的個人と形成陶冶との] 両者の関係についていえば、普遍的個人（個体）では、あらゆる契機が、それぞれ具体的な形式と固有の形態をとって明らかにされる。

《註解》ヘーゲルは、前節で普遍的個人（個体）と形との関係を、明らかにしてから、前者の個人（個体）が、より低次の前者の個人（個体）のありかたをとることについて説明している。

(3) 無教養で不完全な個人（個体）の一つが支配的となり普遍的個人（個体）はぼかされる。

Das besondere Individuum ist der unvollständige Geist, eine konkrete Gestalt, in deren ganzem Dasein *eine* Bestimmtheit herrschend ist und worin die anderen nur in verwischten Zügen vorhanden sind.

1 Individuum] Individuum aber

1-2 Gestalt, … und] Gestalt, deren ganzes Dasein Einer Bestimmtheit zufällt, und

ところが、特殊的個人（個体）は、不完全な精神としての、ある具体的な形態をとっており、その現

存全体ではただ一つの規定が支配的であって、他の諸規定はぼかされた輪郭のような状態だけで存在する。

《註解》 特殊的な個人（個体）とは、いわば一つの意識形態に限定されている自然的意識なのである。

**(4) 精神の各段階では以前の段階は目立たなくなる。**

In dem Geiste, der höher steht als ein anderer, ist das niedrigere konkrete Dasein zu einem unscheinbaren Momente herabgesunken;

一般に、他の精神よりも高次の段階にある精神では、低次の段階での具体的現存は、目立たぬ契機になりさがってしまっている。

《註解》 ここから見れば、『精神現象学』の道とは、特殊的個人（個体）が、低次の特殊的個人（個体）のありかたの段階を辿りながら、普遍的個人（個体）の段階へ到達しようとするものなのである。

**(5) 事象そのものの形態は後には陰影となる。**

was vorher die Sache selbst war, ist nur noch eine Spur; ihre Gestalt ist eingehüllt und eine einfache Schattierung geworden.

前には、事象そのものであったものが、いまはかろうじて痕跡をとどめるのみであり、その事象そのものの形態は蔽われて、一抹の陰影となっている。

《註解》 前には事象そのものであったものとは、前文に従えば、低次の精神である。そして、その事象そのものの形態とは低次の段階での精神の具体的現存である。それが、高次の現存に蔽われて陰影しか見えなくなっている。

**(6) 意識経験は実体の想起である。**

Diese Vergangenheit durchläuft das Individuum, dessen Substanz der höherstehende Geist ist, in der Weise, wie der, welcher eine höhere Wissenschaft vornimmt, die Vorbereitungskenntnisse, die er längst innehat, um sich ihren Inhalt gegenwärtig zu machen, durchgeht;

2 in der Weise, wie der, welcher] auf die Art, wie der

このような過去をたどるのは、高位の精神を実体とする個人（個体）である。そして、そのたどり方は、程度の高い学にとりかかろうとする人が、以前から通曉していた予備になるさまざまな知識を、その内容をもう一度自分にはっきりさせておくために通覧するというものである。

《註解》 ここに『精神現象学』が、過去の世界精神の想起という性格をもつことが明らかにされる。この精神は、個人にとっては、その実体であるから、想起された実体は主体である。

**(7) 学への導入は過去の想起である。**

er ruft die Erinnerung derselben zurück, ohne darin sein Interesse und Verweilen zu haben.

1 derselben] desselben

その人は、そういった知を想起しはするが、とくにそれに関心をもってかかずらうわけではない。

《註解》 普遍的な精神としては程度の高い学にとりかかることに関心があるので学への導入にとどまるわけにはゆかないが、個人としては世界精神の過去を意識の経験の道として想起しすわけである。

**(8) 個人は普遍的な精神の諸段階を過去としてたどる。**

Der Einzelne muß auch dem Inhalte nach die Bildungsstufen des allgemeinen Geistes durchlaufen, aber als vom Geiste schon abgelegte Gestalten, als Stufen eines Wegs, der ausgearbeitet und geebnet ist;

1-2 Der Einzelne ... durchlaufen] So durchläuft jeder einzelne auch die Bildungsstufen des allgemeinen Geistes,

たしかに、個々の人としては、普遍的な精神が形成されてきた陶冶の段階を、実際に内容の上でもたどってゆかねばならない。しかしそれは、精神によってはすでにぬぎすてられた諸形態についてのことであり、切り開かれならされた道の諸段階上のことである。

《註解》 前文の「知を想起しす」とは、この文によれば、精神によってはすでに脱ぎ捨てられた諸形態を個人が意識経験によってたどることである。

**(9) 『精神現象学』は成長過程である。**

so sehen wir in Ansehung der Kenntnisse das, was in früheren Zeitaltern den reifen Geist der Männer beschäftigte, zu Kenntnissen, Übungen und selbst Spielen des Knabenalters herabgesunken

1 so ... herabgesunken] wie wir in Ansehung der Kenntnisse das, was in frühern Zeitaltern den reifen Geist der Männer beschäftigt, zu Kenntnissen, Übungen und selbst Spielen des Knabenalters herabgesunken sehen,

したがって、知見に関して、かつての時代には熟年の人々の成熟した精神が取り組んだものが、いまでは少年期に属する知見や練習に、いや遊戯にさえなりさがっているのが見られる。

《註解》 ここから、『精神現象学』が、少年期から熟年期への成長という性格をもっていることがわかる。

**(10) 個人の教育的進級課程に世界史が映されている。**

und werden in dem pädagogischen Fortschreiten die wie im Schattenrisse nachgezeichnete Geschichte der Bildung der Welt erkennen.

1-2 und ... erkennen] und in dem pädagogischen Fortschreiten die wie im Schattenrisse nachgezeichnete Geschichte der Bildung der Welt erkennen



そして、教育上の進級課程において、世界形成の歴史が、影絵のように映されているのが認められるであろう。

《註解》 さらに、ヘーゲルは、個人（個体）の形成陶冶とは、世界の形成そのものを辿りなおすことであるといっている。

**(11) 世界史は非有機的自然である。**

Dies vergangene Dasein ist bereits erworbenes Eigentum des allgemeinen Geistes, der die Substanz des Individuums und so ihm äußerlich erscheinend seine unorganische Natur ausmacht.

1 ist bereits] ist schon

1 Individuums … erscheinend] Individuums oder

— こうして過去に現存したものは、普遍精神にとっては、すでに獲得され所有されている。この精神は、個人（個体）の実体をなすのであって、個人（個体）にとってはそれは外から現れ、精神の有機化されていない自然なのである。

《註解》 歴史で形成された世界は、個人（個体）の実体となっており、非有機的自然なのである。なお、非有機的自然については、*Phän.* S. 124; S. 191 を参照されたい。

**(12) 形成陶冶は非有機的自然の占有である。**

— Die Bildung in dieser Rücksicht besteht, von der Seite des Individuums aus betrachtet, darin, daß es dies Vorhandene erwerbe, seine unorganische Natur in sich zehre und für sich in Besitz nehme.

1-2 — Die Bildung … darin] Die Bildung des Individuums in dieser Rücksicht besteht, von seiner Seite aus betrachtet, darin

こう考えてくると、形成陶冶とは、つぎのようなものである。個人（個体）の側から見れば、それは、個人（個体）が自分の前にあるものを獲得し、非有機的自然を消費して自分にとりこみ、それだけ占有することである。

《註解》 『精神現象学』では、普遍的精神は世界史となり、個人にとっては、有機的に占有される非有機的自然である。

**(13) 形成陶冶は実体の自己意識化である。**

Dies ist aber von der Seite des allgemeinen Geistes als der Substanz nichts anderes, als daß diese sich ihr Selbstbewußtsein gibt, ihr Werden und ihre Reflexion in sich hervorbringt.

1-2 aber … hervorbringt] aber ebensosehr nichts anders, als daß der allgemeine Geist oder die Substanz sich

しかし、実体であるところの普遍的精神の側からみれば、このことは、実体がみずから自己意識をそなえるようになり、自分の生成と自分の自己還帰とを実現してゆくことにほかならない。

《註解》 つぎに、個人（個体）の形成陶冶とは、同時に実体が自己意識をそなえるようになることなのである。普遍的精神とは、実体を意味し、主体が、意識の対象となった局面である。

## 《第29節》

### 【要旨】

【29a】 この部分は、意識の経験を『精神現象学』の視点から説明している。

【29b】 まず、この部分の前半部から後半部にかけて、古代の形成陶冶を前提した上で、近世における形成陶冶のことがいわれている。第33節では、個々の多様で直接的なものを思考によって普遍的な表象に高める仕事が、古代におけるプラトンやアリストテレスの仕事だったが、近世では、そういう表象を流動化し、主体化することがいわれている。ここでは、このことが、思考規定としての即自的なものを対自存在の形式に転換することであるといわれている。

### 【29a】

(1) 学的体系は精神の形成陶冶の叙述である。

Die Wissenschaft stellt sowohl diese bildende Bewegung in ihrer Ausführlichkeit und Notwendigkeit als [auch] das, was schon zum Momente und Eigentum des Geistes herabgesunken ist, in seiner Gestaltung dar.

学は、この形成陶冶の運動を、あますところなく、しかも必然的なものとして叙述するとともに、すでに精神の所有に帰してその契機となっているものを、それに形態を与えながら叙述する。

《註解》 まず、学は、精神の形成陶冶の頂点をなし、その所以はその詳細さと必然性を備えた叙述であることにある。そして、その叙述は、個人（個体）の実体ないし非有機的自然である精神の諸契機に形態を与えていくことを通してなされてゆくのである。なお、形態というのが、意識の形態たとえば人倫的意識や良心などであることは容易にわかるが、契機というのは、わかりにくい。それは世界形成の歴史の所産でありながらさらに古代哲学によって加工されたものようである。ヘーゲルは、これを思考規定と考えているようである。

(2) 『精神現象学』の目標は精神の自己知である。

Das Ziel ist die Einsicht des Geistes in das, was das Wissen ist.

目標は、知である当のものを精神が洞察することである。

《註解》 そのような学の叙述の目標は、「知である当のもの」を精神が洞察することである。この「知である当のもの」とは、『精神現象学』の最後の「絶対知」であるが、それは、また「絶対概念の啓

示」ともいってよい。『精神現象学』とは、精神が知としての自己を洞察することであり、それは、精神の深みとしての絶対概念を啓示することで終わる。

(3) 目標への忍耐が必要である。

Die Ungeduld verlangt das Unmögliche, nämlich die Erreichung des Ziels ohne die Mittel.  
忍耐のない人々は、手段はぬきにして目標に達することを求めるが、これは不可能な要求である。

《註解》ここで、この叙述に忍耐が要求されているのは、まさに精神の否定性が根底にあるためである。《第32節》参照

(4) 意識の諸形態は避けて通れない必然である。

Einesteils ist die Länge dieses Wegs zu ertragen, denn jedes Moment ist notwendig;

一方では、この道の長さながさに耐えなければならない。なぜならば、契機の一つ一つが必然的なものだからである。

《註解》絶対知への道では、契機の一つ一つを絶対的ではないと否定してゆく忍耐が要求される。それは、避けて通れない必然の道だからである。

(5) 意識の諸形態は個体的で全体的真理に通じている。

— andernteils ist bei jedem sich zu *verweilen*, denn jedes ist selbst eine individuelle ganze Gestalt

1 — andernteils ist] — andernteils

他方では、どの契機のもとでも立ち止とどまらなければならない。なぜならば、各契機はそれ自身、個体的にして全体的な形態だからである。

《註解》《第32節》では、「精神の威力は、否定的なものに面と向かってそれを直視し、そのもとで立ち止まるという、まさにこのことに存する。否定的なもののもとで立ち止まること、それを存在へ転ずる魔法の力なのである」とある。立ち止まるというのは、否定的なものを存在にお転ずる否定性である。また、意識は個性性でもあることが、「個体的にして全体的な形態」という表現から判明する。現に「理性」では、意識は同時に個性性である。この詳細については、拙著『ヘーゲル哲学の根源——『精神現象学』の問いの解明』、法政大学出版局、1989年、200頁を参照されたい。また、意識に一つの形態が全体的であるとは、全体という体系の真理を個体の範囲で映し出していることを意味する。「序説」《第20節》では「真理は全体である」といわれている。

(6) 各契機は絶対的なものとして考察される。

und wird nur absolut betrachtet, insofern seine Bestimmtheit als Ganzes oder Konkretes oder das Ganze in der Eigentümlichkeit dieser Bestimmung betrachtet wird.

各契機の規定態が、全体的なもの、あるいは具体的なものとして考察される以上、言い換えれば、全体がその規定の固有性において考察されるのである以上、各契機は、絶対的なものとしてしか考察されない。

《註解》 先の叙述の詳細さとは、各々の契機のもとに立ち止まり、それらを絶対的なものとして見なし、吟味することなのである。なお、原典 445 頁以下参照。

【29b】

(7) 世界史は世界精神の遍歴と労苦である。

— Weil die Substanz des Individuums, weil sogar der Weltgeist die Geduld gehabt, diese Formen in der langen Ausdehnung der Zeit zu durchgehen und die ungeheure Arbeit der Weltgeschichte, in welcher er in jeder den ganzen Gehalt seiner, dessen sie fähig ist, herausgestaltete, zu übernehmen,

1 weil sogar] weil

3 Weltgeschichte ... herausgestaltete] Weltgeschichte

個人（個体）の実体は、というより世界精神そのものは、つぎのことに耐えてきた。すなわち、世界精神の各契機の諸形式を時間の長大な広がりの中のなかで遍歴し、各形式において、世界史に可能なかぎり世界精神の全内容を形態化して現しつつ、世界史の巨大な労苦をひきうけることに耐えてきた。

《註解》 ここで世界精神が、世界史の長い道において自分に国家などの形態を与え、個人（個体）の実体となることが明言されている。世界史が個体の実体であり、世界精神としての個体の性状が意識であるがゆえに意識は個性性である。

(8) 『精神現象学』は世界精神の自覚の労苦である。

und weil er durch keine geringere das Bewußtsein über sich erreichen konnte,

世界精神が自分についての意識に達するためには、これより軽い労苦をもってしては不可能であった。

《註解》 前文でいわれた世界精神を体現する個人の忍耐とは、世界精神による自覚の道でもあることが、この文で明言されている。この道を個人（個体）が歩んで自分の実体を自覚する次第については、《第28節》の最後ですでにいられていた。

(9) 自分の実体の概念把握の労苦は世界精神の労苦よりも多い。

so kann zwar der Sache nach das Individuum nicht mit weniger seine Substanz begreifen;

1 zwar der Sache nach] zwar

2 begreifen;] begreifen.

そうであるからには、個人（個体）は核心からいうならばこの世界精神よりも少ない労苦では自分の実体をなすほど概念把握しえない。

《註解》 これまでに、自分の実体の自覚がいわれたが、ここでは、自分の実体の概念把握がいわれ、『論理学』の多大な労苦の場面になる。

(10) 同時に個人の労苦は軽減されている。

inzwischen hat es zugleich geringere Mühe, weil *an sich* dies vollbracht,

—であるのに、個人（個体）は同時に労苦を軽減されてもいる。というのは、自体的には事は成就されているからである。

《註解》 世界精神は、世界史の道をすでに整備したのであるから、それを自体存在にして世界史の道を振り返って自覚すること（対自化）ができる。

(11) 内容の現実性は単純な思考規定となっている。

der Inhalt schon die zur Möglichkeit getilgte Wirklichkeit, die bezwungene Unmittelbarkeit, die Gestaltung bereits auf ihre Abbeviatur, auf die einfache Gedankenbestimmung, herabgebracht ist.

1 Wirklichkeit, … herabgebracht ist.] Wirklichkeit und die bezwungne Unmittelbarkeit ist.

内容の現実性はもはや消去されて可能性に移され、その直接性は克服されている。〔個々の〕形態化はすでに見取り図におさめられ、単純な思想規定となりさがっている。

《註解》 形態化では、内容の直接的現実性が消去され、その直接性も克服されている。その形態化を見取り図におさめると単純な思考規定になり、たとえばアリストテレスが解明した諸カテゴリーとなる。

(12) 思考内容は実体となっている。

Schon ein *Gedachtes*, ist der Inhalt *Eigentum* der Substanz;

1 *Gedachtes*, … Substanz;] *Gedachtes*, ist der Inhalt Eugenthum der Substanz;

すでに思考されたものであるからには、内容は、実体が所有している。

《註解》 アリストテレス『形而上学』の諸カテゴリーは「実体とは何か」という問いへの解答であるという意味で実体の内容なのである。

(13) 問題は自体存在の対自化である。

es ist nicht mehr das Dasein in die Form des *Ansichseins*, sondern nur das weder mehr bloß ursprüngliche noch in das Dasein versenkte, vielmehr bereits *erinnerte* *Ansich* in die Form des *Fürsichseins* umzukehren.

1 Dasein … umzukehren.] *Dasein* in das *Ansichsein*, sondern nur das *Ansich* in die Form des *Fürsichseins* umzukehren,

したがって、もはや〔個人（個体）の〕生活そのものを自体存在の形式に変えてかかる必要はない。

むしろ、ただ原初的でもなく、ただ生活へ沈潜することでもはやなく、すでに思い出されるものとして内面化された自体的なものを、対自的存在の形式に転換すべきなのである。

《註解》ここから、『精神現象学』は、古代哲学の観想によって素朴な生活に無関与となり、それを内面化した点から出発する。内面化された実体を思い起こすことが対自存在への転換である。

(14) それは、実体の自覚作業の詳述である。

Die Art dieses Tuns ist näher anzugeben.

1 Die … anzugeben.] dessen Art näher zu bestimmen ist.

この作業がどのようになされるかを、もう少し詳しくのべなければならない。

《註解》この作業とは、実体の内面化と内面化された実体を思い起こすことである。

#### 引用文献略号

- GW*: Georg Wilhelm Hegel, *Gesammelte Werke in Verbindung mit der Deutschen Forschungsgemeinschaft*. Hrsg. v. der Rheinisch-Westfälischen Akademie der Wissenschaften. Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1968ff. (*GW* の後に巻数と頁数を記してある)
- Phän.*: G. W. F. Hegel, *Phänomenologie des Geistes* (1807). Hrsg. v. H.-F. Wessels u. H. Clairmont, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1988.